

イントナーションの指導について

著者	波多野 満雄
著者別名	Mitsuo Hatano
雑誌名	白山英米文学
巻	45
ページ	55-69
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011960/

イントネーションの指導について

波多野 満 雄

はじめに

筆者は、波多野（1997, 2008, 2014, 2018）において、さまざまな観点から現在の英語教育についての考察や意見を述べてきたが、本稿ではイントネーションの観点から英語教育について考えてみたいと思う。

イントネーションとは声の高さ（ピッチ: pitch）の上昇や下降のことであり、イントネーションによって微妙な意味の綾や感情の程度を表すことができる。しかしながら、高校まではほとんどの場合、下記のように文の種類によってイントネーションが決まっているものとして教えられるが、それ以上の詳しい説明は行なわれず、イントネーションの表す意味については全く触れられることはない。

- (1) a. I like [↘] apples. （平叙文：下降調）
（私はリンゴが好きです）
b. Are you [↑] hungry? （Yes-No 疑問文：上昇調）
（お腹が空いていますか？）
c. What's your [↘] name? （Wh 疑問文：下降調）
（お名前は？）

多くの場合、例（1a）のように平叙文では下降調（英文中に [↘] で表示）が用いられ、例（1b）のように Yes-No 疑問文では上昇調（英文中に [↑] で表示）が用いられ、例（1c）のように Wh 疑問文では下降調が用いられる。しかしながら、何故それぞれの構文が上記のイントネーションとなるのかについては説明されない。また各構文において基本となる型以外のイントネーションを取る場合については指導されない。

例えば、例（2a-b）および（3a-b）は、同じ文でも異なるイントネーションで発話されており、それぞれ違った意味を聞き手に伝えている⁽¹⁾。このことから、構文とイントネーションの組み合わせは固定されたものではないこと、そして、イントネーションは情報伝達上大きな意味を持っていることがわかる。

- (2) a. I beg your [↗] pardon?
 (もう一度言ってもらえませんか?)
 b. I beg your [↘] pardon.
 (申し訳ありません)
- (3) a. You have lovely [↘] eyes.
 (君はきれいな目をしているね)
 b. You have lovely [↘↗] eyes⁽²⁾. (今井, 1995: 168)
 (君は目はきれいなんだがなあ…)

どの様なことを指導する場合でも同じであるが、初めから細かい区別、詳細な用法を教えてしまつては、かえって根本的なことが記憶されず、効果的な学習とはならないことが多い。効果的な教育には段階を踏んだ指導が必要である。本稿では、高校を卒業した英語学習者に対するイントネーション教育において、何に重点を置いて指導すべきか、留意すべき点は何かについて考察してゆくつもりである。

まずは言語においてイントネーションを含めて音というものが果たす役割について考察してゆく。

1. 英語における音の役割

言語というものは本来、音声による表現が根源的なものである。従つて話し言葉には情報や感情を伝達する仕組みが書き言葉と同じように、いや、ある点では書き言葉以上に備わっている。英語における音声によるそれらの仕組みにはイントネーションの他に、語自体のもつ音声、つまり発音やアクセントなどがあるが、音を発生させないポーズもまた、情報伝達上大きな役割を担っている。以下、それぞれ指導すべき点について考察してゆく。

例えば英語においては、例 (4a-b) のように内容語には強アクセント (英文中の語に [´] で表示) が、機能語には弱アクセントが置かれ、内容語を際立たせることになっている。また、この強弱アクセントは例文から分かるように、交互に用いられるわけではない。しかし、強アクセントと強アクセントの間にいくつ弱アクセントが入ろうと (例文では0~3の弱アクセントが入っている)、強アクセント間の時間的間隔はほぼ一定であり、これが英語独特のリズムを生み出している。

- (4) a. I think that he gót bétter as he gót ólder. (BNC⁽³⁾)

(彼は年を取ればとるほど、元気になっていったように思われる)

b. You don't have to be a genius to see that he's lying. (根間, 1996: 132)

(彼が嘘をついていることは誰にでも分かることだ)

このアクセントは内容語を際立たせたり、リズムを生み出す他に、ある語に焦点をあて、対比的な意味を生み出すこともある。英文は通常文末の要素に核アクセント (= 強アクセントの中で最も強い強勢のあるもの) が置かれ、それが新情報の焦点となる。しかしこの型を崩し、核アクセントを任意の要素に置き、その要素を焦点とすることもできる。下記の例 (5) では通常 blue に強勢が置かれ、意味は (5a) のようになる⁽⁴⁾。しかし、blue 以外の語に強勢が置かれた場合もその語に新情報としての焦点が置かれることになり、例 (5b-f) のように他との対比的な意味が生じる。(参考、Quirk *et al.*, 1985)

(5) I am painting my living room blue. (Quirk *et al.*, 1985: 1365)

a. (私は自宅のリビングを青く塗っています) : blue に強勢

b. ((他の部屋ではなく,) リビングを…) : living に強勢

c. ((他の人ではなく,) 私の…) : my に強勢

d. ((他のことではなく,) ペンキ塗りを…) : painting に強勢

e. (…を(やっていないのではなく,) やっている) : am に強勢

f. ((他の人ではなく,) 私が…) : I に強勢

次に、これも一種の言語上の音の工夫とすることが出来るポーズ (= 休止) について見てゆく。ポーズを用いる際の一番の原則は、意味的まとまりごとに用いるということである。例 (6a) では文中に3度ポーズが用いられているが(ポーズは文中で [|] で表わしている)、それによってこの文は意味的に4つの部分から成り立っていることが聞き手に明瞭になる。例 (6b) の場合も同様であるが、細かく見てゆくと、最初のポーズは関係代名詞が非制限的用法であることも、そして2番目は関係代名詞節がそこで終わりであることも表していることが分かる。

(6) a. The man got so fat | that the button popped off his pants | and he had to use a safety pin | to keep them up. (根間, 1996: 179)

(その男はひどく太ったので、ズボンのボタンが飛んでしまい、安全ピンでズボンが落ちないようにしなければならなかった)

- b. The passengers, | who arrived late, | missed the train. (竹林, 1996: 460)
(その乗客たちは、着くのが遅れてしまい、列車に間に合わなかった)

以上のように、イントネーションを含めて、音が言語上果たす役割は多種多様である。このことを認識した上で、以下で考察してゆくイントネーションがどのような役割を担っているのかを指導することが必要となる。

2. イントネーションの種類とその意味合い

イントネーションの型をいくつ認めるかに関しては学者によってさまざまであるが、本稿では、教育上まずはイントネーションの概略を理解させることが先決であるとの理由から、基本的な型である以下の3つの型（「下降調」「上昇調」「下降上昇調」）のみ取り上げる⁽⁵⁾。以下、竹林（1996）、根間（1996）、および Wells（2006）を参考にまとめると、3つの型はそれぞれ以下のような意味合いを持っていると言える。それぞれの型に対して、指導の際に有用なキーワードを付しておく。

2.1 下降調 [↘]: 「完結」「確かさ」「断定」

下降調は一番自然な音調であり、文末に一番多く用いられる音調である。言わば無標の、基準となるイントネーションと言える。言葉を変えれば、自分の述べることに、+*a*の要素（迷い・疑念・ためらい・遠慮）が無いことを表すイントネーションである。従って、話者が伝えた情報が完結していること、話者はその情報に対して迷い・疑念が無く、確信・自信を持っていることを表す。それゆえ、ためらいや遠慮のない断定的な話し方となる。

2.2 上昇調 [↗]: 「未完結」「継続」「不確かさ」

上昇調は音声的に下降調の真逆の音調であるから、表す意味も真逆になる。従って、話者が伝えた情報は未完結であること、つまりはまだ続きがあること、または言っていないこと（＝含み）や言えない、断定できないこと（＝疑念）があることを表す。それゆえ、情報に対して確信・自信がないことを表すことになり、断定的でない言い方となる。下降調を用いて断定してよい場合にあって上昇調を用い、断定をしないことで丁寧さが生まれる場合もある。

2.3 下降上昇調 [↘↗]:「部分的確かさ」(=「部分的不確かさ」)「ためらい」 「断定回避」

上記の2つのイントネーションが合わさったものであり、意味的にも両者が合わさって独自の意味合いを表す。具体的には、話者が自信を持って断定している部分と、不確かであり、言っていないこと(=含み)があることを意味する部分から成り立っている。あることを断定しつつ、不確かさや未完結を感じさせる表現なので、控え目な感じを持たせたり、言外の含みを持たせたりするときに用いられる。上昇との違いは、下降調が表す断定の部分があることである。

以上3つのイントネーションとその意味合いについて述べたが、いずれも抽象的なものであり、指導の際には全体的な意味合いと共にキーワードを使用し、各イントネーションの効果をキーワードと結びつけて説明することが重要である。

3. イントネーションと構文の関係

この章ではイントネーションとさまざまな構文との関係を考察してゆく。まずは例(1a-c)で見たように、それぞれの構文が何故それぞれに基本的なイントネーションの型の一つと結びついているのかを見てゆく。これらはいずれも構文の情報伝達上の基本的な役割と結びついており、言わば、それぞれに構文における標準となるイントネーションであると言える⁽⁶⁾。その後、この基本的なイントネーション以外のものを用いる場合を見てゆくが、そこには標準となるイントネーションの場合にはなかった「+a」の要素が加わることになる。

3.1 平叙文

平叙文においては例(7a-c)のように下降調が普通である。平叙文は、基本的には自分の述べることに確信・自信を持っており、含みも無く、断定的な物言いだからである。2章で述べたキーワードのうち「確かさ」・「断定」と結びついている。

(7) a. He found her in a small [↘] kitchen. (BNC)

(彼は彼女を小さな台所で見つけた)

b. Canada is to the north of the United [↘] States. (竹林, 1996: 443)

(カナダはアメリカの北側にある)

c. I'm delighted to [↘] meet you. (Wells, 2006: 25)

(あなたに会えてうれしいです)

しかし、上昇調を用いると、下降調の断定的な言い方ではなく、「確かではないが」「…かしら」のような自信のない口調になったり、相手の同意や賛同を求める気持ちが含まれたり、例 (8a-c) のように疑問文に近い感じになる。キーワードのなかの「不確かさ」と結びついている。文語の場合、音声は表せないで、その代わりに疑問符が付くことがある。

(8) a. He lives in a [↗] condo? (根間, 1996: 168)

(彼は分譲マンションに住んでいます?)

b. The machine is running [↗] well? (竹林, 1996: 448)

(機械はちゃんと動いています?)

c. You think I'm [↗] crazy? (Wells, 2006: 36)

(私狂っていると思います?)

次に、下降上昇調を用いた場合であるが、下降調によって文で述べている内容を断定的に伝える一方で、上昇調によって不確かな部分があること (= 言っていない部分があること) を表すことになり、対比的な、含みのある感じ (「～だが、一方…」) が生ずる。また、上昇を用いることで、断定を表す下降調を避けたことになり、控え目な感じ (「～であると思うが、…」) を表す表現としても利用される。いずれも下降上昇調の持つ特性である「部分的確かさ」や「断定回避」と結びついている。

(9) A: Who's that? (あれは誰)

B: Well I know her [↘↗] face. (Wells, 2006: 27)

(彼女の顔は知っているけれど…)

(10) The store isn't open [↘↗] Monday. (根間, 1996: 168)

(その店は月曜日は開いていない)

(11) a. That's a most [↘↗] challenging problem. (竹林, 1996: 451)

(それは厄介な問題ではないでしょうか)

b. I hope you [↘↗] like it! (BNC)

(気に入ってくれるといいのですが)

例 (9) では下降調によって断定的に伝える確かなこと (= 彼女の顔は知って

いるということ)を伝える一方で、上昇調によって不確かなこと(=顔以外のことはよく知らないということ)を暗示することになる。例(10)の場合も同様で、「月曜に開いていないこと」を断定的に述べ、「他の曜日については知らないこと」を暗示することになる。一方、例(11a-b)では自分の意見や希望を、下降調を用いて断定的に述べる一方で、上昇調を用いることで完全な断定を避ける表現となり、「～であると思うが／～だといいたのですが、(どうでしょうか)」という控えめな意味合いになっている。

3.2 Yes-No 疑問文

Yes や No で答える疑問文であり、例(12a-c)のように上昇調が普通である。上昇調を用いることによって、Yes なのか No なのか、真なのか偽なのかについて話し手が確信を持っていないことを表す。上昇調の持つ特性である、「不確かさ」と結びついている。話し手は自分の気持ちが高不確かであることを相手に伝えて、そうすることで間接的に質問をしている(=相手に答えを促している)ことになる。

- (12) a. Would it be possible to donate by monthly [↑] instalments? (BNC)
(月賦払いで寄付は可能でしょうか?)
- b. Will you open the [↑] window? (竹林, 1996: 447)
(窓を開けてくれますか?)
- c. Have you been here [↑] long? (Wells, 2006: 45)
(こちらには長く滞在してるのですか?)

しかし、Yes-No 疑問文であっても下降調を用いる場合がある。この場合、例(13)のように、構文が基本的に表す「質問」の意味に、断定的要素が加わることになり、下降調を用いた付加疑問文と類似の意味合いが生じ、念押しとして用いられる。このイントネーションは、例(14)のように、聞き手がきちんと聞いていなかったため、質問を繰り返すときにも用いられる。これは本来返答を促す疑問文が、単に既に述べた内容を繰り返すだけのものになり、返答を促す働きが無くなったためであろうと思われる。疑問文の部分は、既に述べた内容を事実として相手に伝えているだけなので、断定的な下降調が用いられるのだと言える。

- (13) A: Do you like [↑] whisky? (ウイスキーは好きですか?)

B: No. (いいえ)

A: No. Well, do you like [↘] beer? (根間, 1996: 169)

(好きじゃない。それじゃあ、ビールが好きなんですね?)

(14) A: Have you come [↗] far? (遠くから来たんですか?)

B: Sorry? (え?)

A: I said, have you come [↘] far. (Wells, 2006: 46)

(遠くから来たんですか、と言ったんです。)

3.3 Wh 疑問文

疑問詞を用いた疑問文であり、例 (15a-c) のように下降調が普通である。この疑問文は疑問詞によって特定される情報を相手に要求することが目的であり、迷いの気持ち (= 不確かさ) を相手に伝えることで間接的に答えを促している Yes-No 疑問文とは性質が違う。従って、ためらいや遠慮のない、断定的な物言いとなり、下降調が用いられるのである。

(15) a. Who told you [↘] that? (BNC)

(誰がそんなこと君に言ったんだ?)

b. Why did you give up [↘] smoking? (竹林, 1996: 444)

(どうしてタバコを吸うのを止めたんだい?)

c. Where's my [↘] knife? (Wells, 2006: 42)

(私のナイフはどこ?)

時に例 (16a-b) のように上昇調が用いられることがあるが、それは下降調の持つ断定性から発生する遠慮のなさ、ぶしつけな態度や詰問調を避けるためと言える。

(16) a. What did you do after [↗] class? (竹林, 1996: 448)

(放課後君は何をしたんだい?)

b. When did you [↗] arrive? (Wells, 2006: 43)

(何時着いたのでしょうか?)

3.4 付加疑問文

肯定文または否定文の末尾に極性が逆の付加疑問がついたものである。イントネーションについては主文の部分は下降調となり、付加部は上昇調と下降調

の二通りがある。主文部は平叙文であり、下降調になるのは原則通りである。付加部の二通りのイントネーションについては、例 (17a) (18a) (19a) のように下降調の場合、「断定的」な言い方となり、その結果、断定的な物言いを重ねることになるので、相手に返事を求めるのではなく、「～でしょ」「～だろ」というような「念押し」の意味合いが強まる。一方、例 (17b) (18b) (19b) のように上昇調にすれば、疑問文の典型的なイントネーションであり、「～でしょ」「～だろ」というように、「確信が持てない」ことを相手に伝えることになる。従って、主文部で肯定・否定の片寄りを表明しながらも、相手に一応 yes-no の返答を求める意味合いが生まれる。

- (17) a. He has a part-time [↘] job now, [↘] doesn't he?
 (彼は今パートタイムで仕事をしていますよね?)
 b. He has a part-time [↘] job now, [↗] doesn't he? (根間, 1996: 169)
 (彼は今パートタイムの仕事をしていますでしょうかね?)
- (18) a. They've finished their [↘] job, [↘] haven't they?
 (彼らは仕事を終わっていますよね?)
 b. They've finished their [↘] job, [↗] haven't they? (竹林, 1996: 462)
 (彼らは仕事を終わっていますでしょうかね?)
- (19) a. It's [↘] snowing, [↘] isn't it?
 (雪が降っていますよね?)
 b. It's [↘] snowing, [↗] isn't it? (Wells, 2006: 49)
 (雪が降っていますかね?)

3.5 選択疑問文

Or を用いて選択肢を示す疑問文であり、疑問詞を用いるものと用いないものがある。イントネーションは二通りあり、一つは例示される項目の中で選択するもので、or の前が上昇調、or の後は下降調である。このイントネーションが一般的である。上昇調は「未完結」「継続」と、下降調は「完結」と結びついている。

一般的なイントネーションの型を具体的に見てみると、まずは疑問詞を用いないものは、例 (20a) のように最初の選択肢である or の直前までがひとかたまりの音調群となって上昇調となり、or の後の残りの選択肢の箇所は下降調となる⁽⁷⁾。例 (20b) のように選択肢が3つ以上ある場合は、最後の選択肢まで一つ一つ上昇調となり、最後のみ下降調となる。このイントネーションが持

つ意味を一つ一つ考えてみると、最初の上昇調は Yes-No 疑問文と同じく確信が持てないということを表している。Yes-No 疑問文は真偽の間でどちらか確信が持てないのに対し、選択疑問文の場合は複数の選択肢の中でどれが正しいのか確信が持てないのである。また、それと共に上昇調のもう一つの特徴である「未完結」を表すと考えられる。選択肢がまだあり、文が、つまりは選択肢が終わりではないことを表しているのである。3つ選択肢がある場合の2番目の上昇調も「未完結」を表すと言える。そして最後の下降調はこの反対である。つまり、下降調が「確信」以外に持つ特徴である「完結」によって選択肢がこれで終わりであることを表しているのである。一方、例 (21a-b) のように疑問詞付きの選択疑問文の場合、選択肢の前で一旦下降調になる。その後は疑問詞が無い場合と同じで、最後の選択肢まで上昇調であり、最後のみ下降調になる。選択肢の前の部分が下降調になるのは本来の Wh 疑問文と同じであり、イントネーションの原則通りである。疑問詞が無い場合と有る場合の違いは、前者が「どれなのか」と確信が持てない言い方であるのに対して、後者が「どっちだ」と明確に問いかける言い方になるということである。

- (20) a. Would you like [↑] tea or [↘] coffee? (竹林, 1996: 458)
 (紅茶がいいですか、コーヒーがいいですか?)
 b. Would you like [↑] chocolate, [↑] vanilla, or [↘] strawberry?
 (Quirk *et al.*, 1985: 823)
 (君はチョコがいいかな、バニラかな、それともイチゴかな?)
- (21) a. Which [↘] team won, [↑] Oxford or [↘] Cambridge? (竹林, 1996: 458)
 (どっちのチームが勝ったの、オックスフォード、それともケンブリッジ?)
 b. Which ice cream would you [↘] like, [↑] chocolate, [↑] vanilla, or [↘] strawberry? (Quirk *et al.*, 1985: 823)
 (君はどのアイスがいいのかな、チョコかな、バニラかな、それともイチゴかな?)

一般的ではないもう一つのイントネーションは、例示される項目以外の選択の可能性も暗示するもので、or の後も上昇調である。例 (22) では最後の選択肢である coffee の部分も上昇調で発話されることによって、その他の選択肢も話者の念頭にあることを暗示することになる。これらは上昇調の持つ特性の

「未完結」や「継続」と結びついている。

- (22) Would you like [↗] tea or [↗] coffee? (根間, 1996: 169)
(紅茶がいいですか、コーヒーがいいですか、それとも…)

3.6 命令文

命令文は例 (23a-c) のように下降調が普通である。聞き手に対してやってもらいたいことを迷いや遠慮がなく伝えており、下降調の特性の「断定」と結びついている。

- (23) a. Shut up and [↘] listen. (BNC)
(黙って聞け)
b. Don't be [↘] late. (竹林, 1996: 444)
(遅れちゃだめだ)
c. Tell me the [↘] truth. (Wells, 2006: 61)
(本当のことを言え)

しかしながら、下降上昇調を用いると含みが加わることで、下降調の持つ「断定」的な意味合いが和らぎ、穏やかな、遠慮した口調になる。例 (24a-b) の場合、「やってもらいたいんだけど (どうだろう)」と相手に配慮した含みが出ると考えられる。

- (24) a. Be [↘↗] quiet. (竹林, 1996: 451)
(お静かに願えませんか)
b. Watch [↘↗] out! (Wells, 2006: 61)
(気をつけてね)

3.7 感嘆文

感嘆文では例 (25a-c) のように下降調が普通である。感じたままの喜怒哀楽をそのまま伝える文であり、迷いや遠慮がなく、「断定」と結びついている。

- (25) a. What a [↘] waste! (BNC)
(何てもったいない)
b. How nice these flowers [↘] smell! (竹林, 1996: 446)

(これらの花は何ていい匂いなんだ)

c. What pretty [↘] eyes she has! (Wells, 2006: 60)

(何てかわいい目をしているんだ、彼女は)

4. その他の場合

ここまでは主に構文とイントネーションの関係について考察してきたが、この章では句や節に関する考察を行う。

4.1 節＋節

節と節が連続した場合、文全体でひとつの音調群と見なされ、最後にだけ下降調を用いることもあるが、一般的には最初の節の終わりに軽い上昇調（または平坦調）が用いられ、後ろの節の最後は下降調となる。特に例 (26a-b) のように If, because, when などの副詞節が主節に先行した場合はそうであるが、等位節と等位節が結びついた場合も、例 (26c) のように同じイントネーションが用いられる。これは上昇調の持つ意味合いである「継続」によって文が終わっていないことを示し、文の最後を下降調にすることで情報の「完結」を表しているのである。

(26) a. When the ambulance [↗] arrived, Sister Cooney came down to see him [↘]
off. (BNC)

(救急車が到着すると、修道女クーニーが彼を見送りに来た)

b. If a man bites a [↗] dog, that is [↘] news. (竹林, 1996: 458)

(人が犬に噛みついたら、それはニュースだ)

c. Transport is considerably cheaper than in the [↗] UK but prices are on the
[↘] increase. (BNC)

(輸送費はイギリスよりかなり安いですが、物価は上がっています)

4.2 文中の区切り

文中において、ある一定のまとまった語句（例えば、名詞句・形容詞句・前置詞句・長い主語など）の後で休止をとる場合、例 (27a-b) のように一般的に軽い上昇調（または平坦調）が用いられる。これも文が終わっていない（＝「継続」している）ことを示すことになる。

(27) a. The most popular part-time jobs on [↗] campus | are in the college [↗]

bookstore | and college [↘] library. (根間, 1996: 179)

(大学内で一番人気のアルバイトは書店と図書館でのものです)

b. First, I'll go to the [↑] supermarket, | then to the vet to pick up the [↑]
dog, | and then to my daughter's [↘] school. (竹林ほか, 1998: 193)

(まず、スーパーに行って、それから獣医さんの所に行き、犬を引き取り、
そして次は娘の学校に行きます)

おわりに

以上、イントネーションの指導についての考察の結果をまとめると次のようになる。

- ・高校まではイントネーションと構文をセットにし、一律的に組み合わせが決まっていると指導されることがほとんどであるが、イントネーションを一つの組み合わせで個別に理解させるのではなく、全体を統合的に理解させるためには、以下に述べるネイティブスピーカーが持っているイントネーションに対する感覚を学習させる必要がある。
- ・言語の基本は音声であり、音声には色々な意味が込められており、音声のひとつであるイントネーションもさまざまな情報や話し手の感情を表す。
- ・下降調のイントネーションの表す意味は「完結」「確かさ」「断定」であり、基準となるイントネーションと言える。
- ・上昇調のイントネーションの表す意味は「未完結」「継続」「不確かさ」であり、下降調の真逆と言える。
- ・下降上昇調のイントネーションの表す意味は「部分的確かさ」(= 「部分的不確かさ」) 「ためらい」「断定回避」であり、上昇調と下降調の2つの意味が合わさったものとなっている。
- ・英語のさまざまな構文はそれぞれ特定のイントネーションを用いる場合が多いが、それはそれぞれの構文とイントネーションの表す意味合いが一致しているからである。
- ・基本的なイントネーションを用いない場合、その構文が持つ機能(叙述・質問・命令・感嘆等)に加えて、使用されたイントネーションの持つ意味合いが加わることになる。
- ・イントネーションは構文(= 文全体) に対応するだけでなく、文内で複数使用される場合があるが、その場合も、それぞれのイントネーションの持つ意味合い通りに使用されている。

NOTE

- (1) 例 (2a) の場合、文語では疑問符が付くことがあるが、口語では疑問符自体の音というものは無いので、イントネーションのみが意味の違いを判別する指標だという点に注意。
- (2) 本稿では下降上昇調は、英文中に [↘↗] で表示している。
- (3) British National Corpus より採取した例文。小学館コーパスネットワーク (<https://scnweb-japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp/?1>) を利用した。
- (4) 強勢を blue に置いた場合、下記のように他の色との対比が生じる場合もある。
I am painting my living room blúe. ((他の色ではなく、) 青く…)
- (5) 基本の3つの型の他に以下のイントネーションの型が挙げられる。(参考、竹林, 1996)
 - ・ 上昇下降調：下降調の強調であり、強い感情を表す感嘆文に用いられることが多い。使用頻度は低い。
 - ・ 平板調：意味が希薄で「未完結」「継続」を表し、上昇調と類似しているが、「疑問」や感情的な要素が無い。
また、各イントネーションも下位区分されることがあり、例えば、下降調は低下降調 (low-fall) と高下降調 (high-fall) に下位区分され、下記の例のように後者のほうが下降の落差・変動幅が大きいので強い感情が込められる。従って前者が冷静さや無関心、そっけなさを示すのに対して、後者は強い関心、興味、感動、興奮、あるいは強い断定を表す。
a: Do you like carrots? (ニンジンが好きですか) (竹林, 1996: 442)
b1: [↘] Yes./ [↘] No. (低下降調)：好きか嫌いか答えているだけ。
b2: [↘] Yes!/ [↘] No! (高下降調)：強い感情を表す。
(大好きだとも／大嫌いだ)
- (6) このように特別な状況が無ければ用いられる音調を Wells (2006) はデフォルト・トーン (default tone) と呼んでいる。
- (7) 下記のように tea から文末までが一つの音調単位として上昇調で発音されると、全体が意味的にまとまることになり、選択肢はひとつということになる。その場合、選択疑問文ではなく Yes-No 疑問文ということになる。
Can I bring you up a cup of [↗] tea or something? (BNC)
(紅茶か何かをお持ちしましょうか)

REFERENCES

- 安藤貞雄 2005. 『現代英文法講義』 東京：開拓社.
- 波多野満雄 1997. 「学校文法を超えて—語用論からのアプローチ—」『東洋大学紀要教養課程篇』 36, pp. 159-166.
- 波多野満雄 2008. 「英語の文法教育について」『白山英米文学』（東洋大学文学部紀要英米文学科編） 33, pp. 19-37.
- 波多野満雄 2014. 「英語教育についての一考察—字義通りの語句解釈—」『白山英米文学』（東洋大学文学部紀要英米文学科編） 39, pp. 15-29.
- 波多野満雄 2015. 「疑問文についての一考察」『白山英米文学』（東洋大学文学部紀要英米文学科編） 40, pp. 23-39.
- 波多野満雄 2018. 「主観性の観点からの英語教育」『白山英米文学』（東洋大学文学部紀要英米文学科編） 44, pp. 39-53.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今井邦彦 1995. 『英語の使い方』（テイクオフ英語学シリーズ 4） 東京：大修館書店.
- 村田勇三郎 1982. 『機能英文法』 東京：大修館書店.
- 根間弘海 1996. 『英語の発音とリズム』 東京：開拓社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 竹林 滋 1996. 『英語音声学』 東京：研究社.
- 竹林 滋、斎藤弘子 1998. 『英語音声学入門』 東京：大修館書店.
- Wells, J.C. 2006. *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press. 長瀬慶來（監訳）『英語のイントネーション』 東京：研究社.
- 安井 泉 2002. 『音声学』（現代の英語学シリーズ 2） 東京：開拓社.